

## 優良経営体事例

# 有限会社 古本農産

調査日 平成28年11月17日

所在地 香川県坂出市

URL [www.furumoto-farm.jp](http://www.furumoto-farm.jp)

経営主 古本 忠

主要事業 酪農、肥育、水稲

主要作目 酪農 75頭  
肥育 110頭  
水稲 3ha  
wcs 3.5ha  
飼料作物 5ha  
作業受託 12ha

就農タイプ 継承

法人化 平成16年(就農後46年目)

売上 1億円

従業員 常勤 5名(内役員 2名)  
臨時雇用 2名

## ヒストリーあらすじ

- ・高校卒業後、父とともに農業経営。
- ・酪農主体の経営へ転換。
- ・肥育部門を開始し、水稲・資料作物を組み合わせた有畜複合型経営へ転換を進めた。
- ・早くから簿記記帳と青色申告に取り組み、経営診断と適切な施設・機械投資に活かして徐々に規模拡大、資本を集約し、継続性のある経営に発展。
- ・副産物を最大限活用し、肥育経営の低コスト化を実現した。
- ・ミルクパーラーなどの各種機械導入など、生産技術の改善に積極的に取り組み、水稲部門、飼料作物部門の機械化一貫作業体系を確立した。
- ・「自分でできるものは自分です」という考えのもと、さまざまな工夫を凝らした自作のフリーバーン牛舎を設計・施工、作業性を考慮した農舎等の改良、機械の改良などを自分でを行い、作業効率の向上を図っている。
- ・酪農部門、肥育牛部門、水稲・作業受託部門を有機的に結び付け、地域及び自社内部の資源循環による大規模複合経営を実践している。
- ・耕畜連携の取組を進め、循環型農業体制の構築を目指す。

### エッセンス

#### ●経営の安定化

- ・純利益だけにとらわれず、徐々に着実に経営発展させ、経営資源を充実させる。
- ・酪農、肥育、水稲作業受託の3つを一体とした経営の安定。
- ・地域及び自社での循環型農業の実践。

#### ●徹底した省力化・効率化

- ・簿記記帳と経営分析を行い、投資効果を最大限発揮できる施設・装備の導入・改良。
- ・家族の能力をフルに発揮できる体制づくり

#### ●無形財産を生かし有形財産を形作る

- ・経営権は先が見える後継者に早く渡す。
- ・他の業種を経験、Uターン就農でその技術・人脈を経営に生かす。
- ・経営は人だ。付き合いを大事に。出会いが人を育てる。



家族中心で効率的な有畜複合型経営



飼料作物で自給率向上



工夫を凝らしたフリーバーン牛舎

飼料作物部門の  
機械化一貫作業体系の確立



# 有限会社古本農産 ヒストリー

就農期 (昭和33年～45年)	転換期 (昭和46年～52年)	確立期 (昭和53年～平成8年)	発展期 (平成9年～27年)	将来構想 (平成28年～)
<p>●就農のきっかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供のころから兄と一緒に手伝い。</li> <li>・昭和33年高校卒業後は兄と大工仕事を行っていたが、父の経営状況を知り、就農を決意。</li> </ul> <p>「私が古本の農業経営を立て直さなければ」と思った。</p>	<p>●酪農主体の経営へ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和43年結婚。酪農の規模拡大。</li> <li>・昭和45年、ミカンをやめて酪農主体の経営を開始。</li> </ul> <p>ミカンの価格が生産過剰で全国的に暴落。</p>	<p>●簿記記帳による経営診断</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和53年、簿記記帳を開始。</li> <li>・昭和54年、青色申告を開始。</li> </ul> <p>各種機械や施設の導入の際には、資金面での負担が大きくなる</p>	<p>●放し飼い方式(フリーバーン牛舎)の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな工夫を凝らした自作のフリーバーン牛舎を設計・施工。</li> </ul> <p>牛に与えるストレスが少なく、健康的。使用頭数は倍増しても、衛生費はほぼ同額。</p>	<p>●耕畜連携への取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集落営農法人(農)はやしだ等と連携し、WCSの生産拡大。</li> <li>・堆肥還元により循環型農業体制の構築。</li> </ul> <p>法人内での有機資源の循環体制をつくるだけでなく、地域全体での循環ができ、ることで、知力向上、収量増につながり、地域への貢献ができる。</p>
<p>●父と農業経営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和33年、高校卒業後、父とともに農業経営。</li> <li>・昭和37年、ミカン園1ha開墾し、本格的に農業に従事。</li> </ul> <p>ミカンの植栽が推奨されていた。</p>	<p>●肥育部門を開始し、有畜複合型経営へ転換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和46年肥育部門を開始。</li> <li>・経営を任せられ、水稻、飼料作物を組み合わせた複合化を進める。</li> </ul>	<p>●経営の合理化と規模拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・副産物活用による肥育経営低コスト化</li> <li>・利用権を設定し、稲作の規模拡大を行う。</li> </ul>	<p>●生産技術の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミルクパーラーの導入</li> <li>・有用微生物を活用した良質な水の確保</li> </ul> <p>従来のパイプライン方式による搾乳と比べ、作業時間が1/3に。また、作業が楽になり、労働の質的向上も図れた。</p>	<p>●地域環境保全への理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校等の食育活動へ協力。</li> <li>・地域行事への積極的な参加。</li> </ul>
<p>●酪農の開始</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和40年、4頭から酪農経営を開始。</li> </ul>	<p>●作業受託の開始</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和47年、水稻の作業受託に取り組む。</li> </ul> <p>酪農部門、肥育牛部門、水稻・作業受託を有機的に結び付ける。</p>	<p>●肥育素牛に酪農で生産された子牛を活用。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・牛舎の敷料はもみ殻の活用。</li> <li>・粗飼料は水稻の稲わらをすべて自給。</li> <li>・糞尿は良質堆肥として圃場に還元。</li> <li>・水稻、酪農部門の複合経営の利点を生かすことで、肥育部門の低コスト化。</li> </ul>	<p>●省力化への取組</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種機械の導入</li> <li>・肥培管理の省力化</li> <li>・作業性を考慮した農舎等の改造</li> <li>・発酵床方式による除糞作業の省力化</li> </ul> <p>・播種から収穫調整まで機械化一貫作業体系を確立。</p> <p>・「自分でできるものは自分でする」という信念のもと、施設・機械を改造。</p>	<p>●6次産業化への取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・米の直販。</li> <li>・生産した農産物の加工・販売</li> </ul> <p>高付加価値化による収益性向上。</p>
		<p>●後継者、家族経営協定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成5年、息子が就農</li> <li>・平成8年、家族経営協定締結。</li> </ul> <p>経営権は時代感覚の新しい後継者に早く渡す。実験は若い者が持つべき。社長は決済だけでよい。</p>	<p>●平成16年10月 有限会社古本農産設立</p>	

有限会社古本農産 <課題と対応策>

フェーズ		就農期 (昭和33年～45年)	転換期 (昭和46年～52年)	確立期 (昭和53年～平成8年)	発展期 (平成9年～27年)	将来展望 (平成28年～)
主な出来事		●ミカン園1ha開墾 ●酪農開始	●ミカンをやめて酪農中心へ ●肥育開始 ●作業受託開始	●簿記記帳・青色申告開始 ●息子が就農 ●家族経営協定	●放し飼い方式導入 ●省力化へ取り組み ●法人化	●六次産業化 ●耕畜連携
経営課題	ヒト・組織	父	結婚	後継者、役割分担	省力化	雇用の拡大、地域法人との連携
	土地・設備	園地開墾	酪農の規模拡大	水稲作の規模拡大	機械化、牛舎改良	堆肥舎増設
	カネ	経営改善	経費節減、自己資金	低コスト化	制度資金、補助事業の活用	制度資金、補助事業の活用
	技術・ノウハウ	酪農技術の習得	肥育技術の習得	経営の合理化	生産技術の改善	生産技術の改善
	販売・販路	JA	JA	JA	JA	JA、直販、市場
	情報	JA、県	JA、県	JA、県	JA、県	JA、県
	地域		地域の水稲作業受託	耕畜連携(稲わら)	循環型農業の実践	耕畜連携(WCS)
	具体的内容	・父の経営状況は悪い ・ミカン園の開墾 ・酪農技術の習得	・酪農の規模拡大 ・肥育部門開始 ・作業受託開始	・副産物活用による肥育経営の低コスト化 ・水稲作の規模拡大	・ミルクパーラー等の導入 ・牛舎の改造	・堆肥舎の増設
対応策	・ミカンの導入 ・酪農の導入	・牛舎拡大 ・肥育部門を開始し、有畜複合経営へ転換	・肥育素牛に酪農子牛を活用 ・敷料にもみ殻活用 ・粗飼料は稲わら ・糞尿は良質堆肥化	・放し飼い方式の導入 ・ミルクパーラー導入 ・播種から収穫まで機械化一貫作業体系の確立	・堆肥舎の増設 ・商品開発 ・新しい生産技術の導入による受胎率向上、増体向上	
外部環境	※農業基本法公布 ※東京オリンピック ※国民所得倍増計画	※第1次オイルショック ※山陽新幹線が博多まで開通	※第2次オイルショック ※チェルノブイリ原発事故 ※瀬戸大橋開通	※明石海峡大橋開通 ※BSE(狂牛病)		